

マイスター・エックハルトにおける神の「一」 : ドイツ語説教第21番を中心に

石川 充ユージン

<https://doi.org/10.15017/7232052>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 36, pp.1-16, 2022-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン :
権利関係 :

マイスター・エックハルトにおける神の「一」

— ドイツ語説教第21番を中心に —

石川 充ユージン

はじめに

中世ドイツの思想家マイスター・エックハルト¹⁾ (ca. 1260-1328) の著作は、ドイツ語著作とラテン語著作に大別される。19世紀初頭にドイツ語説教の写本を収集したF・フォン・バーダー、19世紀中頃ドイツ語著作集を編纂したプファイファーの貢献もあり、かつて異端とされた思想は歴史の表舞台に再び姿を現すこととなった。このようにラテン語著作よりもドイツ語著作の方が先に読まれる機会を得たのであるが、エックハルトの学術的研究はこの時点で始まったわけではなかった。1880年のドミニコ会士ハインリヒ・デニフレによるラテン語の写本群発見を端緒として、ようやく神学者エックハルトの思想に対する学術的研究が始まった。しかし、エックハルト研究において長らく支配的であったのは、「ラテン語著作集がエックハルトの主要思想で、ドイツ語著作はその不正確な残響にすぎないとする見解」²⁾であった。中山は、非学問的性格をもつドイツ語著作に対し、ラテン語著作はその大部分が学問的活動の所産であるがゆえに概念性の点において厳密で、かつその写本の信憑性が遥かに高いことから、「学問性を重視するならば、ラテン語著作はドイツ語著作に比べて優先されるべきであり、ドイツ語著作はラテン語著作に依拠して研究されるべきであると思われる」³⁾と述べる。

このような背景ゆえに、従来のエックハルト研究においてドイツ語著作はラテン語著作に比して注目されてこなかった。しかし、エックハルトの思想の全体像を把握するためには、ラテン語著作の研究に終始することでは不十分である。高位聖職者であったエックハルトは、当時粗野な民衆語であった中高ドイツ語を説教に用いてまで、民衆の心を掴み教化することに努めた。エックハルトが高度な神学に精通していたことは彼がパリ大学神学教授を二度務めたという事実からも伺い知れるが、その思想が大学外部の一般民衆にそのまま理解されたとは考えにくい。エックハルトが自らの思想の要点を押さえつつ、民衆にも把握可能な表現や言葉を用いて説教を行ったと考えるのが自然であろう。換言すれば、ドイツ語説教はエックハルトの思想のエッセンスが凝縮された結晶である。以上のことを考慮するだけでも、エックハルトの思想研究におけるドイツ語著作の重要性はもはや疑う余地もない。

ドイツ語著作の意義を明らかにするための準備段階として、エックハルトの思想の根幹をなす神がどのように理解されているか、まずこの問いに答えを与える必要がある。ドイツ語著作に見られる神はどのような存在であるか。ドイツ語説教第21番の冒頭部分にて、

神は「一」(ein)であるとエックハルトは言う。「神は一である」という一見単純な命題の意味を明らかにすることは、ドイツ語著作の内実、ひいてはエックハルトの思想の全容を解き明かすための鍵となる。本稿の目的は、エックハルトの神と「一」を把握する態度の検討、ドイツ語説教第21番の内容と「一」を扱う他著作の内容との比較、さらにドイツ語説教第21番に見られる独特な概念である「否定の否定」についての考察を通じて、ドイツ語著作における神の「一」の意義を探ることである。

1 エックハルトはいかに神と「一」とらえるか

「神は一である」ことの意味を検討するための予備考察として、エックハルトの神と「一」を把握する態度について確認しておきたい。エックハルトは自らの神名論を展開するにあたって、ユダヤ人の思想家モーゼス・マイモニデス(1135-1204)から大きな影響を受けている。それは、ラテン語著作『出エジプト記註解』15章3節「全能者というのが彼の名である」において、マイモニデスの著書『迷える者たちの導き』から多くの引用がなされていることから明らかである。マイモニデスから影響を受けたうえで、エックハルトは神をどのようにとらえるのだろうか。

『出エジプト記註解』15章3節では、否定神学が主題として扱われる。否定神学では、神については何も肯定的に述べることはできないとする立場がとられる。否定神学の根拠としてエックハルトがマイモニデスの『迷える者たちの導き』第1巻第54章から引用するのは、神の非物体性、不変性、非欠如性、および被造物との間の非類似性である。⁴⁾ エックハルトは、肯定的な名⁵⁾が物体性、可変性、欠如性、類似性を含むとして、神の本性には相応しくないとする。⁶⁾ というのも、彼によると、神においてはいかなる特性の付加もありえないからである。すべての肯定的な名は、神に関して置かれる何らかの付加物を述べるないしは含む。そうでなければ、それらは肯定的であると言われえない。⁷⁾ したがって、神と肯定的な名はそれぞれの根本的な性質ゆえに、調和し合うことはない。

さらに、エックハルトはこのような肯定神学の否定のために七つの論証を提示する。第一の論証では、あらゆる特性が実体に付加されることは、神の純粋性に矛盾するとされる。⁸⁾ 第二の論証では、あらゆる特性が実体の外にあることは、神の本性の充溢性に矛盾するとされる。⁹⁾ 第三の論証では、あらゆる特性が付带的であることは、神の単一性に矛盾するとされる。¹⁰⁾ 第四の論証では、神と異なる何らかの特性が神のうちにある場合、複数の永遠的なものが存在することは、神の本性の無限性にふさわしくないとされる。¹¹⁾ 第五の論証では、何らかの特性が持つ何らかの多様性は、神の本性の一性にふさわしくないとされる。¹²⁾ 第六の論証では、神のうちに何らかの特性があることは、中間のものを持たない第一のものとしての神の優越性にふさわしくないとされる。なぜなら、その場合は存在を除けば無しかないにもかかわらず、その特性は存在と無あるいは存在と非存在の中間者となるからである。¹³⁾ 第七の論証では、あらゆる特性は本性的に中間のものでしかありえないことが示される。¹⁴⁾ 神は中間のものを持たないゆえに、神はあらゆる特性を持たない。

以上の論証の内容を見る限り、エックハルトは神からの徹底的な付加物の排除を試みている。外部からの特性の付加を遮断するだけではない。彼は神の内部からの付加された特性の完全な排除を試みている。エックハルトにとって否定神学とは、神を究極的に純粋なものとして捉えるための手段であったのだ。

一方、「一」はどのように把握されるだろうか。ラテン語著作『三部作への序文』において、エックハルトは「一」(unum)を適切に把握する方法について入念に言及している。『三部作への全般的序文』においては、『三部作』の内容が読者にとって明快となるよう前置きされるべきことについて言及されている。その一つとして、「普遍的名辞に関しては、すなわち存在、単一性、真、知恵、徳などに関しては、決して付帶的特性の形と本性に従って想像ないし判断されてはならない」¹⁵⁾ことが挙げられる。理由は次のように説明される。

存在そのものは、そしてそれと置換しうる同一のものは、後なるもののように事象に続いて生じるのではなく、事物におけるすべてのものよりも先なるものである。したがって存在そのものは、或るものにおいてそれがそれであることも、或るものによってそれがそれであることも、或るものの結果としてそれがそれであることも受け入れることはなく、生じるのでもなく、或るものに続いて生じるのでもなく、すべてのものに先立ち、先行するものである。¹⁶⁾

エックハルトは存在、一、真、善を神に適用しうる普遍的名辞であるという点で同一のものとしてとらえる。存在そのものと置換しうる「一」は、存在そのものの同様に或るものの影響を受けて「一」であることはなく、他の事物に先立って成立し、独立している。また、「一」はその生成において他の事物によって干渉されることのない、超越した概念である。そのため、本質的ではない他の事物に即して「一」が思惟された場合は、その「一」はもはやエックハルトが想定している「一」ではありえない。

また、『提題集への序文』においては、エックハルトは読者に向けてさらなる注意を喚起する。エックハルトは『全般的序文』と同様に、彼の記述の内容を読者が明確に理解できるようにいくつかの注意事項を挙げる。「一」に関しては、「一(unum)は一性(unitatem)のみを意味する」¹⁷⁾ことが挙げられる。unumは「一」を意味する語 unus の中性形である。unitatemの主格は unitas であり、unitasは unusに状態を意味する接尾辞 -tas が付されて成立している語である。これを踏まえると、「一は一性のみを意味する」とは、「一は一である状態のみを意味する」ことを表す。「一」はこれ以上に何の意味も持たない。さらに、エックハルトは「神のみが正確に言えば存在、一、真、善である」¹⁸⁾とする。先に述べられたように、純粋な存在、一、真、善は超越的である点で、付帶的事物における存在、一、真、善と似て非なるものである。そして、純粋である前者の名辞は神にのみ当てはまる。存在、一、真、善が純粋でなくては、これらの概念が神に適用されることはありえない。何かが付加された時点で、それは神ではないからである。以上見てきたように、エックハルトは否定神学によって神の純粋性を追求するのみならず、神の名辞である「一」につい

でも、その概念自体の意味と把握の仕方において一切の付加なき純粋性を一貫して確保せんとしている。このような姿勢は彼の「神は一である」ことに関する主張にどのように反映されているだろうか。

2 「神は一である」

ドイツ語著作で「神との合一」概念がしばしば言及される一方で、その土台となりうる「神は一である」ことを問題とするドイツ語著作はほとんど見られない。ドイツ語説教第21番は、この命題を中心的に取り扱う数少ないドイツ語著作である。この説教から、ドイツ語著作における神の「一」の位置づけを探ることとしたい。エックハルトは、ドイツ語説教第21番の冒頭部分で次のように述べる。

私は、聖パウロが使徒書簡で語る言葉をラテン語で話したが、それは次のとおりである。「一なる神にしてすべてのものの父は、すべてにわたって、すべてのものを通して、すべてのものの内で祝福されている。」(……) パウロが語る最初の言葉、つまり「一なる神にしてすべてのものの父」という言葉の内では、パウロは、変化を伴う言葉を一言たりとも語らない。彼が「一なる神」と言うとき、それは神が神自身において一であり、すべてのものから離れているということである。神は何物にも属さず、また何物も神には属さない。神は一である。¹⁹⁾

パウロによる「一なる神」という言葉からエックハルトが見出すのは、端的に言うならば神の独立性である。神は他の何かによって神であることはなく、神自身においてその自立した存在を確固たるものとしている。すなわち、何かが神の原因となることはなく、神は神として、「一」として存在している。また、神からはいかなるものも離れている。そして、神が何らかの範疇に収まることはなく、それに加えて神が何かの範疇となることもない。つまり、「神は神以外の何かである」ないしは「神以外の何かが神である」という命題は、この条件に従う限りは何の意味もなさない。以上の解釈から明らかとなるのは、エックハルトが神を他の何ものも到達しえない絶対的に隔絶された、超越的な存在として把握しようとしているということである。

また、上の引用で「聖パウロが使徒書簡の中で語った言葉をラテン語で話した」とある。同様の内容をラテン語説教第37番で聖書の同一箇所を引用していることから、ラテン語説教第37番の後にドイツ語説教第21番が成立した可能性が高い。これら二つの説教は同一の主題を扱うものの、ドイツ語説教第21番では即座に神の「一」が述べられる一方、ラテン語説教第37番では着実な根拠の提示のうえで神の「一」が論証されるという相違点が見られる。エックハルトはラテン語説教第37番において、『エフェソの信徒への手紙』4章6節を引用した直後に、『「一なる者」』が第一に注目される。なぜなら、否定によって神は知られるからである。すなわち、神は把握しえない。第二に、神は区別されないものである

からである」²⁰⁾と述べる。神は否定によって知られるがゆえに「一」である。エックハルトはここで、肯定文で神について述べる場合、それは神ではなく別のものを述べることになるとする否定神学の考え方に従う。神は区別されないがゆえに「一」である。さらに、神の「一」に関してエックハルトは次のように詳細に述べている。

「一なる者」である神。注目すべきは、一は上位の、より先なる、ないしは第一の本質的特質であるということである。すべてのものに先立って神はあるのである。というのは、「私の前に神は造られざる」からである。すなわち神は「一なる者」であり、また「私の後にも是あらざる」からである。²¹⁾

ここでは「一」の持つ他に先行する性質に基づき、いかなるものにも先行する神が語られる。エックハルト曰く、「一」とは上位で、先行する、第一の本質的な性質である。そして、神は「一」であるがゆえに、その性質は神にもそのまま当てはまる。エックハルトにおける神の「一」は、神が生成や生起に関しても第一であるという意味をも有しているのである。

さらに、「一」と多に関しては、「一はすべての多が共にしているものであり、それによってそれらの多が一であるところのものであり、この一が神である」とし、その理由を「神は一なる者であり、一は神であるから」だとする。²²⁾「一」は、あらゆる多によって共有されている。すなわち、数を持つすべての事物は、いずれもその基礎となる「一」を持つのである。それゆえに、「一」は多種多様であるさまざまな事物を統合することが可能であり、それは「一」である神も同様である。そして、エックハルトは『ガラテヤの信徒への手紙』3章20節の一節「神は一なる者である」を引用し、この聖句を「一」が神であることの根拠とする。「一」なる神は、多なる他の事物を統合する役割を担うのである。

また、「神はすべてのもののうちにあり、すべてのものにおいて一なる者であり、『すべては神のうちにある』」。²³⁾「すべては神のうちにある」は、『ローマの信徒への手紙』11章36節から引用されている。エックハルトはこのような神のあり方について言及したうえで、そこから導き出される意味について次のように言う。

そのため、「一なる者」ゆえに万物は一である。それゆえに、神によってではなく他のものによって或るものが一であるということは、それが神によってではなく何らかの被造物によって存在する、ないしは真である、ないしは善であると言われるのと同じである。²⁴⁾

「一」にすべての多が関わるということから発展して、万物の「一」の根源となる神が語られる。「一」のみが「一なる者」である神ゆえに、万物はそれぞれ個々の一として存在できる。その「一」の根拠を与えるものが神ではない他の被造物であるならば、聖書の記述に反する。したがって、神の「一」は他の事物の統合のみならず、神が万物の原因であるこ

とをも意味する。

ここまで「神が一である」ことを主題とする二つの説教の内容を確認してきた。ここからは、説教だけでなくラテン語著作も参照し、エックハルトの神の「一」のより正確な意味へ接近することを試みる。エックハルトは、聖書の註解書の一つであるラテン語著作『知恵の書註解』の7章27節「知恵は一であるので、すべてのことをなしうる」の冒頭部分にて次のような見解を述べる。

「神は一なる者である」と、モーセによって神自身のペルソナに関して言われるとき、このことはイスラエルに、すなわち神を見る人々に、神が一なる者であり多ではないことをのみ教えんとしていると思てはならず、(……) それよりも何かより深遠なことをわれわれに示唆しようとしていると思わなくてはならない。²⁵⁾

エックハルトは、「一」が多くの否定であることに留まらない深遠な意味を有することをモーセの言葉から察知し、「一」に関する持論を展開する。「神は一なる者である」という言葉の意味を適切に把握するために第一に知るべきことについて、エックハルトは次のように述べる。

知るべきことは、「一」とは区別されざるものと同一であるということである。というのも、区別されるものはすべて二ないし複数である一方、区別されざるものはすべて一だからである。さらに、非区別性は神の本性に由来している。なぜなら、神が一方では無限であり、他方では何らかの類ないし存在の限界や境界によって限定されていないからである。²⁶⁾

「一」はすなわち区別されざるものである。例えば、それぞれの人間は区別される。人間同士の区別が成立するのは、人間が複数いるからである。しかし、区別されざるものは区別の要素となるはずの他の事物をもたない。したがって、区別されざるものは「一」とであるといえる。また、そのような非区別性は神に由来する。この根拠として、神が無限である点、そして神が他の事物によって限界づけられることのない点が挙げられる。

このように「一」の非区別性に触れたうえで、「神は一であると言うときには、神とはすべてのものから区別されざるものであって、区別されざることとは最高にして最初の (primi) 特性であることを言わんとしている」²⁷⁾ とエックハルトは述べる。神における非区別性とは、他の事物がもちえない根源的な特権的性質である。この性質を神が有していることを「神は一である」という言葉は意味している。このように、エックハルトは非区別性によって「一」と神を緊密に結びつける。

「神は一である」ことの持つさらなる意味について、エックハルトは次のように述べる。

神が区別されない一であることは、神の最高の完全性を表している。なぜなら、神な

しでは、神と区別されることによって、いかなるものも存在しない、ないしは存在しえないからである。このことは、神のかわりに存在を解釈するときわめて明瞭となる。神は存在だからである。明白なことは、存在は存在するすべてのものから区別されざるものであって、存在しないものが存在と区別されること、また分割されることはありえないということである。ヨハネ福音書1章曰く、「万物は神によってなり、神なくしてなるものはない」。²⁸⁾

神の「一」および非区別性は、神の完全性をも意味する。神が存在することおよび神と区別されないことこそ、あらゆる事物が存在するための根拠であるからである。エックハルトは神の名辞としての存在の解釈によって、神と他の事物の区別の不可能性の証明を試みる。すべての事物は存在している以上、存在を有する。そのため、存在する点では他の事物と共通しており区別されない。さらに、すべての事物は存在である神とも区別されることはない。また、存在しないものは区別や分割のしようがない。以上を踏まえると、存在するすべての事物は非区別性を備える神ゆえに存在できるといえる。神が完全でなければ、事物の存在を一つ残らず保証することはありえない。そのような意味で、神は完全なのである。以上のように、エックハルトにおける神の「一」は、その非区別性によって万物に存在をもたらし神の完全性の根拠として見なされている。

エックハルトはここまでの自身の主張から、「神は一なる者である」という言葉の意味が適切に証明されていると語る。²⁹⁾『ガラテヤの信徒への手紙』3章20節にあるこの言葉の第一の意味が次のように述べられる。

二つの無限が存在することはありえない。(……)というのは、無限とは無いものを除いたものであるからである。神は、いかなる類によって境界づけられることも、限定されることもなく、またいかなる領域にも含まれないものであるがゆえに、無限である。³⁰⁾

第一の意味は、複数の無限の存在の否定である。無限が複数あることはない。その理由として、無限からは無いものが除かれているために、無限においては無いものがないことが述べられる。仮に無限が二つあるとすれば、それぞれの無限は個々の無限として限定づけられてしまうが、それは無限が無限であることに反する。したがって、無限は一つでしかありえない。そして、神はいかなる類や領域によっても規定ないし限定されないために無限であるのだから、「神は一なる者である」ということができる。

「二つないしは複数の区別されざるものが存在することはありえない。区別されざるものとは同一である。(……)しかし神は区別されず、区別されざるものである」。³¹⁾ 以上の主張に見られる第二の意味は、複数の非区別性の存在の否定である。「一」は二や多と異なり区別されえない。仮に区別されざるものが複数あるならば、それは「区別されざるもの」という範疇のもと、一方の区別されざるもの、他方の区別されざるもの、といった形で区

別されてしまい、区別されざるものではなくなる。すなわち区別されざるものとは、いかなるものとも共通項をもたない「一」でなくてはならない。それゆえに、区別されざる神もまた「一なる者」である。

「神は一なる者である」ことの第三の意味として述べられるのは、複数の神々の存在の否定である。

このこと（＝「神は一なる者である」こと：引用者註）ゆえに、『出エジプト記』3章にあるように「神は存在そのものである」のである。というのも、私がこのことを認めると、二つないし複数の神々の存在はありえないことになる。また、二つの神が立てられるようなことがあるならば、それらは二つの神ではなく、それらのいずれも神ではないか、あるいは神がただ一つあるのみであろう。また、他方では、すべての被造物に二つの存在があるようなことになり、したがってすべての存在は二つの存在であるようなことになるだろう。³²⁾

「神は一なる者である」とは、複数の神が存在しないことを意味する。これに従うならば、神が複数存在すると考えたところで、少なくともそのどちらかは神ではない。また、先に述べたように、神は完全であるがゆえに被造物に存在をもたらず。しかし、仮に神が複数いるならば、その複数の神いづれからも被造物は存在をもたられさるることになり、存在が二つある事態に陥る。しかしこのような事態は考えられないため、神が複数あることはなく、「神は一なる者である」。そのうえで、神は唯一の神として、それぞれの被造物に対し存在を一つずつ与えうる。

エックハルトによる神の複数性の否定は、ラテン語著作『出エジプト記註解』20章3節「あなたは他の神々を持つてはならない」においてさらに徹底的な形で行われる。エックハルトは「すべての多や複数性は一から降下したものであり、一を分有している」³³⁾ ことを主要な根拠とし、神の複数性の反証のために八つもの根拠を提示する。そのうち第八の理由では、或るものを神と見なすことに対する次のような批判がなされる。

神であると見なされ、またそのように言われても、それが存在そのものではなく、何か他のものであるときはいつも、それは存在 (esse) なき存在 (ens) であるか、そうでなければ他から存在を持つかである。しかし第一のことは不可能である。第二のことについては、もし万一実際に言われるならば、それはすでに神ではない。というのは、それは存在を他から受け取っているからである。³⁴⁾

或るものを神としても、或るものが存在そのものでないならば、神とは存在である以上その或るものは神ではありえない。また、自らの存在を成立させるために他に依存することは、絶対的に独立している神にはふさわしくない。したがって、人間が神と見なしうる存在はただ神のみであって、神が複数あること、神以外が神であることはありえない。この

ように、神が多でなく「一」であることは、「神のみが神である」という絶対的な肯定と、「神以外は神ではない」という絶対的な否定を意味する。ここに、エックハルトの神の「一」に対するきわめて厳格な態度が見て取れる。

3 否定の否定

「一とは否定の否定、否認の否認である。一とは、それに何も付け加えられていないもののことである。」³⁵⁾ ドイツ語説教第21番に見られる「一」のこのような定義は、奇妙な表現ながら興味深く映る。この定義においては、「一」は「否定の否定」であり、いかなる付加もない純粋なものであるとされる。そのような純粋性を持つ「一」が「否定の否定」であるとはどのような意味か。以下ラテン語著作とドイツ語説教第21番に見られる「否定の否定」に関する記述の検討を行うことで、この奇妙な表現の意味を明らかにする。

ラテン語著作『知恵の書註解』7章20節では、神ではなく存在に関する「否定の否定」について論じられる。エックハルトは「否定の否定」に言及する前に、「一」の多に対する性質について次のように述べる。

一は、一に満たないもの、多であるもの、数えられるものすべてのうちへ完全な形で降下する。個々のものそれ自体において一は分割されるのではなく、消滅することのない一として留まり、すべての数を生み出し、その一性によって形成する。さらにそのうえ、すべての二や多の前に、一は必然的に、事物においても、あらゆる理解においても、先行している。³⁶⁾

「一」は「一」としてそのまま個々の事物のうちに降下し入り込み、多のうちでは変化することなく、数を産出する。つまるところ、「一」はあらゆる事物の基本単位である。また、「一」はあらゆる複数に必然的に先行する。単なる事物においても、実際に人間が事物を把握するときにも、「一」は必ず二や多の前に来るからである。エックハルトはこのような「一」の基本的な性質を示したうえで、「一」のもつ「概念によってではなく否定のみによって、存在の上に何も付加しない」³⁷⁾ 性質を挙げる。このような性質に関連して、「一」と存在の相違点を彼は次のように説明する。

最も直接的な仕方では、一は存在において位置を占めており、それどころか一は、存在そのものの純粋性と真髓ないし極致を表しているのだが、「存在」はそのようなものを表すことはない。すなわち、「一」はあらゆる無の否定と排除によって、存在そのものを、また存在のうちで表す。私はあえて言う、あらゆる否定は味がしないと。したがって、あらゆる否定は、何らかの存在を否定し、その存在が欠如していることを意味するのである。³⁸⁾

「一」は存在のうちにあって、存在の純粋性を表す性質を持つ。この性質は存在という語にはない。「一」はその純粋性によって無を否定し、排除する。これにより、存在は肯定的な形で存在することが可能となる。また、「一」は「一」であることの他に何も存在に付加しない。このような「一」の性質によって、存在は存在そのものとして、純粋な肯定として存在しうるのである。また、「否定には味がしない」とは、事物に対して何かを付加する要素ない性質を、否定が「一」と同様に持たないということである。しかし、否定はある存在が欠けている状態を表現するにとどまる。その一方で、「一」は否定を否定し、純粋な肯定を表しうる。このように存在に対し肯定的な形で純粋性をもたらしことこそが、「一」の持つ唯一無二の性質なのである。

また、「否定の否定」のさらなる意味について、エックハルトは以下のようにも述べる。

それゆえに、否定の否定とは、「一」が表しているものであり、示された名辞のうちにその名辞であるすべてのものが存在すること、そしてその反対の名辞であるすべてのものが存在しないことを表している。しかし、これは必然的に一である。³⁹⁾

「Aでない」ことが否定されるという「否定の否定」の結果、ある名辞のうちにはその名辞に属するものの一切が存在する。その一方で、その名辞に属さないものの一切が存在しない。このような「否定の否定」は、あるものがあり、ないものがないという単一で不純物なきあり方ゆえに、「一」の状態を意味するといえる。それに加えて、「否定の否定」は存在と不在の徹底的な区別という意味も有している。

エックハルトはラテン語著作『提題集への序文』においても、「否定の否定」に関して次のような持論を展開している。ただし、ここで語られる「否定の否定」は『知恵の書註解』とは異なり、神の存在との関連が見られる。

「一」とは否定の否定である。神のような、最初にして充溢した存在のみにふさわしいことにに関しては何も否定されえない。そのような存在はすべての存在をいっしょにあらかじめ持ち、含んでいるためである。⁴⁰⁾

完全にして第一の存在である神は、すべての存在を最初から持ち、含む。換言すれば、「一」なる神においては無いものはないため、否定が否定される。ここでの「否定の否定」は、「欠如に由来する否定の否定」である。また、エックハルトは存在の否定に関して「存在については、ないしは存在によっては、何もかも否定されえず、ないしはいかなる存在も否定されえず、存在そのものには存在の否定の否定がふさわしい」⁴¹⁾と述べる。これは上に引用された「充溢した存在は否定されえない」とする主張に基づく。存在は否定されえない。それゆえに、たとえ存在を否定できるとしても、それは存在がないことを否定することではありえない。そして存在と同様に、「一についてはいかなる一も一性も、一性ないしは一の否定の否定を除いては否定されえない」⁴²⁾というように、「一」という概念そのもの

のに関する「否定の否定」についても言及されている。「一」も存在同様に、「否定の否定」によってしか否定されえない。したがって、ここでの「否定の否定」のあり方は「一の否定の否定」であるといえる。

ここまで検討したように、ラテン語著作の「否定の否定」は概念そのものに対して適用される表現であった。一方ドイツ語説教第21番では、「一」の「否定の否定」に関して次のように述べられる。

一とは否定の否定である。すべての被造物はそれ自体否定をまもっている。つまりある被造物は、別の被造物であることを否定するのである。ある天使は、別の天使であることを否定する。しかし神は、否定を否定する。神は一であり他のすべてを否定する。なぜなら神の外には何もないからである。すべての被造物は神の内にあり、神自身の神性であり、充溢を意味する。⁴³⁾

この説教において、エックハルトは「否定の否定」を駆使して神の性質を巧みに表現している。ラテン語著作とは異なり、被造物や天使といったより具体的な概念を用いた説明がなされている点も特徴的である。内容についても、ラテン語著作の「否定の否定」との間に些細ではあるが大きな相違点が見られる。ラテン語著作では「一」の「否定の否定」が論じられる。一方ドイツ語説教第21番は「一」の「否定の否定」を土台とするものの、主題とするのは「神」の「否定の否定」である。

上に引用した箇所では、エックハルトはすべての被造物には否定があると語る。それというのも、被造物は何らかの被造物であるがゆえに他の被造物ではないからである。彼はこれを説明する際に天使を例に出す。その一方で、神は純粹な「一」である。そのため、被造物のようにその存在によって「それが他の何らかの被造物でない」ことは意味されえず、被造物のような否定は神において成立しえない。このような意味で神は否定を否定する。

また、神の外には何もない。すなわち、神と区別しうるものは一切存在しない。すべての被造物は神に包含されている。また、被造物は神性として神が神であるための根拠となり、神の構成要素であるがゆえに、被造物が神の内にある状態は神を充溢させている状態を意味する。すべての被造物は区別なく神の内にあり、神と区別されることはない。神と被造物の他には何も存在しない。したがって、神は神の外にあるすべてを否定するといえるのである。また、神の内ではそれぞれの被造物の区別はない。そのため、被造物が持つ否定性もその意味をなさない。神はそのような意味でもまた否定を否定する。

さらに、「私が神を否定することにおいては、私は神ではない或るものをつかんでいるのである」⁴⁴⁾という記述からは、神の否定の不可能性が見られる。例えば「神が神でない」と言ったときの神は神ではなく、このように言った人が自らの思惟の中で神と見なした何らかのものである。エックハルトはこれに続けて「神は一であり、神は否定の否定である」⁴⁵⁾と言う。神は「一」として絶対的な肯定であるがゆえに否定のしようがない。ここで「神

は否定の否定である」とされているのは、神は否定しえないからであると考えられる。このことはまた、そもそも認識においても神が否定されえないという意味でもある。神を認識するまいとしたところで、それは他の事物の認識を拒んでいるに過ぎない。したがって、「一」なる神を否認することは不可能である。

以上検討したように、ドイツ語説教第21番に見られる「否定の否定」は、ラテン語著作のそれと比較して神の本質に迫る多様な解釈を施している。「否定の否定」という表現は、神と被造物の関係のあり方をさらに明確に示す。「被造物のような否定の否定」によっては、神は被造物と明確に区別される。「被造物の持つ否定性の否定」によって、神が被造物を区別なく包含するあり方が示される。また、「神の否定可能性の否定」によって、神は「一」であるがゆえに否定も否認もされえないことが示される。

エックハルトの著作に見られる「否定の否定」は、単なる肯定以上に強い肯定を意味する。存在に関しては、存在の疑いのような存在および不在の疑いのような不在が表現される。神に関しては神の完全性が表現される。「一」に関しても「一」の絶対的な存在が表現されるのである。このような絶対的な肯定においては、「それは純粋なそれそのものである」という捉え方がなされている。それゆえに、「否定の否定」は「一」なのである。そしてドイツ語説教第21番で、概念の否定の否定から神の「否定の否定」に到達する。エックハルトは存在と不在に関連させた形で神と被造物を明確に区別し、神の完全性によって神が一切の被造物を包含するあり方を提示する。さらに、「神は一である」ことに基づいて、神の否定が不可能であることも示される。このように、「神は一である」という命題は「否定の否定」によって、単なる否定では不可能な形で神の存在を表現する。「一」なる神を目指してやまないエックハルトは、ドイツ語説教第21番にてようやく神を絶対的な肯定によって表現する境地にたどり着いたのである。

おわりに

エックハルトが語る「神は一である」という言葉には、神に対するきわめて厳格な態度が反映されている。「一」は、ギリシア哲学においては神、全体など哲学の根本語によって規定、記述されると同時に、パルメニデス、プラトン、プロティノスにおいて純粋無相の一者として措定、表現された。⁴⁶⁾ 旧約聖書においては、「我らの神、主（ヤハウェ）は唯一の主である」〔申命記6：4〕に代表されるように、「一」は唯一神信仰の定型表現である。⁴⁷⁾ 教父哲学では、「一」以上に神について肯定的な陳述は考えられないとされる。⁴⁸⁾ 以上列挙した「一」と、ここまで論じてきたエックハルトによる「一」の内容は明らかに類似している。しかし、エックハルトの「一」は神のあり方を表現するための手段にとどまらず、きわめて徹底的な制約を課す。そこに従来の「一」との決定的な違いがある。エックハルトは、神に関しては「一」として捉えること以外は許さない。彼にとっての神の「一」とは、神の単なる様態を表現するだけのものではなく、内にも外にも何の付属物もない神を指し示す言葉であり、それ以上の意味でもそれ以下の意味でも把握することは許さ

れない。「神は一である」という命題は、いうなれば神に向き合う者が遵守すべき掟なのである。

マイモニデスから受容した否定神学、ラテン語著作の「一」に関する考察、そしてドイツ語説教第21番に至るまで、この「神は一である」という命題をエックハルトは断固として主張し続けた。我々は神を肯定的な形でとらえることはできないし、そもそもそれは許されない。かといって、否定するだけでは神は十分にとらえられない。こうした否定神学の課題の解決を試み、エックハルトはラテン語著作で「一」に関する神学的考察を繰り広げた。そしてこの課題を神の「否定の否定」によって解決し、絶対的な肯定によって神を表現することに成功したのが、ラテン語著作で展開された数多くの神学的考察を土台として成立したドイツ語説教第21番であった。ドイツ語説教第21番の神の「否定の否定」は、「神は一である」という言葉を、神を端的に、真正な形で言い表すための表現たらしめたのである。

ドイツ語とラテン語のどちらの著作においても「神は一である」という主張が一貫しており、幾度となく考察を加えていることから、この命題のエックハルトにおける重要性は明白である。しかしこの重要性については、本稿は十分に明らかにできていない。なぜ神が「一」でなくてはならないのか。なぜ人々に神の「一」を説く必要があったのか。現時点で挙げられるこうした問いに対する答えは、今後のエックハルト研究を通じて提示されることになるだろう。

注

- 1) エックハルトのテキストは以下のものを使用した。

Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff. (Deutsche Werke = DW; Lateinische Werke = LW)

なお、略号は以下の通り。

Prol. gener.: Prologus generalis in opus tripartitum; 『三部作への全般的序文』

Prol. op. prop.: Prologus in opus propositionum; 『提題集への序文』

In Exod.: Expositio libri Exodi; 『出エジプト記註解』

In Sap.: Expositio libri Sapientiae; 『知恵の書註解』

Serm.: Sermones; 『ラテン語説教集』

Pr.: Predigt; 『ドイツ語説教集』

- 2) 香田芳樹『マイスター・エックハルト 生涯と著作』創文社、2011、8頁。
- 3) 中山善樹『エックハルト研究序説』創文社、1993、6頁。
- 4) In Exod. n. 46. LW II, 51, 1-6.
- 5) 「肯定的な名」が何であるかについては直接示されていないが、神について肯定的に言われるところのすべてのことの具体例として、エックハルトは慈しみ

(misericordia) や敬虔さ (pietas) を挙げる。(In Exod. n. 44. LW II, 48, 13) 「肯定的な名」はこのような言葉を指していると考えてよいだろう。なお、神のうちには存在せず、神のうちのいかなるものも語れていない点で、これらは神に関しては不適當であるとエックハルトは述べる。(In Exod. n. 44. LW II, 48, 13-49, 5)

- 6) In Exod. n. 46. LW II, 51, 7-9.
- 7) In Exod. n. 47. LW II, 51, 11-14.
- 8) In Exod. n. 48. LW II, 51, 17-18.
- 9) In Exod. n. 48. LW II, 52, 3-4.
- 10) In Exod. n. 49. LW II, 52, 6-9.
- 11) In Exod. n. 49. LW II, 52, 11-12.
- 12) In Exod. n. 50. LW II, 53, 3-4.
- 13) In Exod. n. 50. LW II, 53, 9-12.
- 14) In Exod. n. 50. LW II, 53, 13-16.
- 15) Prol. gener. n. 8. LW I, 152, 8-11.
- 16) Prol. gener. n. 8. LW I, 152, 15-153, 4.
- 17) Prol. op. prop. n. 2. LW I, 166, 8.
- 18) Prol. op. prop. n. 4. LW I, 167, 9-10.
- 19) Pr. 21. DW I, 357, 1-9.
- 20) Serm. n. 375. LW IV, 320, 5-6.
- 21) Serm. n. 377. LW IV, 322, 8-10.
- 22) Serm. n. 377. LW IV, 322, 11-12.
- 23) Serm. n. 377. LW IV, 323, 3-4.
- 24) Serm. n. 377. LW IV, 323, 4-7.
- 25) In Sap. n. 144. LW II, 481, 7-482, 3.
- 26) In Sap. n. 144. LW II, 482, 4-7.
- 27) In Sap. n. 144. LW II, 482, 10-483, 1.
- 28) In Sap. n. 145. LW II, 483, 3-7.
- 29) In Sap. n. 146. LW II, 484, 1-2.
- 30) In Sap. n. 146. LW II, 484, 2-4.
- 31) In Sap. n. 146. LW II, 484, 6-8.
- 32) In Sap. n. 146. LW II, 484, 9-12.
- 33) In Exod. n. 101. LW II, 103, 7-8.
- 34) In Exod. n. 103. LW II, 104, 12-15.
- 35) Pr. 21. DW I, 363, 1-3.
- 36) In Sap. n. 148. LW II, 485, 9-486, 1.
- 37) In Sap. n. 148. LW II, 486, 2-3.
- 38) In Sap. n. 148. LW II, 486, 3-7.

- 39) In Sap. n. 148. LW II, 486, 7-9.
- 40) Prol. op. prop. n. 2. LW I, 169, 6-8.
- 41) Prol. op. prop. n. 12. LW I, 172, 6-7.
- 42) Prol. op. prop. n. 12. LW I, 172, 8-9.
- 43) Pr. 21. DW I, 363, 4-9.
- 44) Pr. 21. DW I, 364, 2-3.
- 45) Pr. 21. DW I, 364, 4.
- 46) 今井知正、「一」、廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・
末木文美士編『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998、78頁。
- 47) 大貫隆、「一」、上掲書、78頁。
- 48) 大森正樹、「一」、上掲書、78頁。

Das Eine Gottes bei Meister Eckhart

—Mit Schwerpunkt auf der deutschen Predigt 21—

Michiru Eugene ISHIKAWA

Diese Abhandlung untersucht die Bedeutung des Satzes „got ist ein“ in Meister Eckharts deutscher Predigt 21 durch eine vergleichende Betrachtung von seinen Schriften über Gottes Einheit.

Zunächst wird Eckharts Haltung in seinem Gottesverständnis im Allgemeinen untersucht. Um dies zu klären, wird erstens eine Untersuchung über seine Negative Theologie in der Schrift „Expositio libri Exodi“ vorgenommen, in der er den jüdischen Denker Maimonides direkt zitiert. Beeinflusst von der Negativen Theologie von Maimonides geht Eckhart der absoluten Reinheit Gottes nach, die keinerlei Attribute hat und also nicht definiert werden kann. Die Bedeutung des Einen muss nach Eckhart in dem „Prologus generalis in opus tripartium“ ebenfalls als absolute Reinheit verstanden werden.

Anschließend wird die inhaltliche Bedeutung des Einen Gottes in seinen verschiedenen Schriften erarbeitet. In der deutschen Predigt 21 versucht Eckhart, Gott als ein absolut transzendentes Wesen zu begreifen, das von nichts anderem erreicht werden kann. In der lateinischen Predigt 37 stellt er zunächst mit der Formulierung „Gott ist einer“ die Negativität und den Primat Gottes dar. Und dann wird auf der Grundlage des Gegensatzes zwischen dem Einen und dem Vielen festgestellt, dass Gott als absolute Entität alle Seinsformen in sich einschließe und zugleich die Ursache von allem sei. In der „Expositio libri Sapientiae“ wird unter Berufung auf die Formulierung „Gott ist einer“ ein Argument für die Vorstellung von Gott als Unendlichem und Ununterscheidbarem sowie ein Argument für die Verneinung der Vielheit Gottes eingebracht.

Schließlich wird die Bedeutung des Ausdrucks ‚Negation der Negation‘ im Einen Gottes in der „Expositio libri Sapientiae“, im „Prologus in opus propositionum“ und in der deutschen Predigt 21 erörtert. Aus der Untersuchung dieser Schriften wird deutlich, dass die ‚Negation der Negation‘ eine stärkere Affirmation impliziert als die bloße Affirmation, und dass in einer solchen absoluten Affirmation die Ansicht vertreten wird, dass etwas unbedingt dasselbe ist.

Eckhart verwendet ‚das Eine‘ nicht nur als Mittel zum Ausdruck von Gottes Wesen, sondern auch als eine sehr gründliche Einschränkung. Das Eine Gottes ist für ihn ein Begriff, der sich auf Gott ohne inneren oder äußeren Zusatz bezieht. Darüber hinaus gelingt es der deutschen Predigt 21 durch die ‚Negation der Negation‘ Gottes, Gott durch eine absolute Affirmation darzustellen. Von Eckhart wurde „got ist ein“ zu einem klaren und treffenden Ausdruck Gottes, was die negative Theologie nicht leisten konnte.